

大原幽学と改心楼の造営

高橋 敏

OHARA Yugaku and the Construction of Kaishinro

はじめに

- ① 改心楼建築の工程
- ② 改心楼建設の異様
おわりに

【論文要旨】

大原幽学の東総地域における活動の結晶ともいえるべきは、性学教団のシンボル、改心楼であった。改心楼をめぐっては幽学弾圧の端緒となった関東取締出役の手先と博徒の乱入事件がここで引き起こされたことでも著名である。関東取締出役が幽学に疑いを持ったきっかけは改心楼の大造な建築であった。

幽学はじめ関係者は江戸訴訟のなかで、質素を趣旨とした道友の寄進にもとづく簡素な建築物であると弁明している。改心楼建築に関しては、その普請の過程の中で作成された第一次史料が多数のこされている。

嘉永二年（一八四九）四月十五日の「絵図面定并材木見立」から翌三年正月十九日の「開校」まで道友寄進の「土普請」から大工方、屋根、畳、石工、左官の職人を雇い入れての建物本体の建造、つづいて家具、食器、蒲団、蚊帳等の生活用品の購入までを実証する。また同時に動員された道友の労働力を克明に追求した。道友の寄進行

為此、大原幽学の性学教団の力量をはかるバロメーターであるからである。

江戸訴訟の際、評定所に提出された幽学側の改心楼建築の費用は金九兩余、これを九名の有力な道友が立て替えたと申告している。ところが普請関係の諸帳面を精査したところ、実際は金四四兩余も費しており、申告の四・五倍にのぼる。しかも、幽学は江戸まで出かけ主要な木材を買い付け、ぜいたく品と思しき道具類まで著名な大店から購入している。これだけでも金七二兩余に及んでいる。

改心楼造営に動員した道友は一八〇日間で四四三二人に達し、二四カ村を包括している。幽学の改心楼造営がこの地域に与えた影響を、決して過小評価することは出来ない。規模といい、建築費用といい、動員された道友の数と広がりといい、関東取締出役が疑いを抱くのは一面当然であったともいえる。改心楼は江戸訴訟の敗北とともに取り毀され、廃墟と化した。今その偉容はのこされた二幅の絵画で偲ぶのみである。

はじめに—二つの絵画資料から

大原幽学と下総村落社会の改革運動のシンボルは何かといえは、「改心楼」であろう。

嘉永二年（一八四九）から翌三年にかけて幽学の性理学運動が急速に拡がり盛り上がるなか、師弟同行の献身と奉仕によって建設されたといわれるのが「改心楼」である。房総漂泊六年のち天保八年（一八三七）長部村に入り、翌年には先祖組合を結成させ、改革の陣頭に立った幽学は、天保十三年（一八四二）九月、長部村名主伊兵衛の屋敷内に講釈場を設けるに至る。しかし性理学をこの地域に確固たるものにするためには常時数十人、ハレの儀礼には一〇〇人規模を収容し得る大がかりな建築物が必要となってきた。

教団の一大拠点を目指すとともに、道友の子弟の教育の場、学校ともしたいという願いがあった。改心楼は幽学と道友たちのアイデンティティの結晶であった。それだけ構想はふくらんで雄大となり建築物は壮大となった。そして嘉永五年（一八五二）衆目の奇異の眼にさらされた改心楼がきっかけとなって牛渡村一件がフレイムアップされ、江戸訴訟が引き起こされる。

安政五年（一八五八）判決が下り、改心楼は幕府から取り壊しを命ぜられ、改心楼と運命をともにするかのよう幽学は自らの生命を断つ。まさに、それだけ改心楼にかけた幽学の思い入れは命とひきかえにするほど絶大であった。幽学と東総村落社会を考察するためには改心楼の建設は避けて通ることは出来ないキーワードである。

幽学研究の改心楼については幽学弾圧の端緒となった「牛渡村一件」の直接の要因として取り上げられてはいるが、江戸訴訟の公的記録を読むに止まっており、建設の発起、大土木工事の実態、施設の概要、そし

て利用、果たした役割等については正確な検討が加えられて来なかった。教団（八石教会）の関係資料を継承する大原幽学記念館には関連文書資料が保存され、詳しい分析が可能である。一方文書資料だけでは建築物改心楼の具体像にはアプローチし難いところがあることも事実である。この意味で絵画資料の渉猟は不可欠である。

ところで目下のところ改心楼の面影を伝える画像資料は僅かA・B二点を数えるに過ぎない。

Aは大原幽学記念館が保存する遠藤文書の線描画である。鑑賞用というよりは図面を重視した絵画である。「嘉永四亥年改之信州上田海野町小野沢貞之助為名残書置改心楼之図」と裏書がなされている。嘉永四年（一八五二）といえは改心楼竣工から一年、道友すべての結集の殿堂として荘厳さの中に最も親しまれ利用された時期である。遠く信州から改心楼を訪れ修行した小野沢貞之助にとって、この地を去るにあたってどうしても絵画に止めて置きたかったであろう。そのため自ら筆を執って線描画に写し取ったものであろう。その一部が良左衛門の手に託されたのではなからうか。

Bは一幅の掛け軸としてプロの絵師によって描かれ、かつては江戸訴訟を資金面で支えた有力門人岩井家に伝わる物であった。幽学没後門人が急増した下総国海上郡足川（現旭市）の故姥山昇衛氏が所蔵したもので現物は確認できなかったが、旭市史三巻に折込となって収載されている。Bには「己未□春応小野沢主人需凍調」の署名と落款が二つ捺印されている。「己未」とは安政六年（一八五九）と思われる、幽学自決の二年後となる。「小野沢主人の需めに応じ凍調」と訓読出来る。「小野沢主人」なる人物は幽学と関係が深い者と考えられるが東総の地域の道友その他関係者の中では特定が難しい。むしろ幽学の信州上田海野町の有力門人小野沢六左衛門家と見るのが妥当と考える。幽学信州退去後も上田・小諸の門人との交友はつづいており、下総長部の改心楼を訪れ、な

かには取替子として改心楼や道友に預けられた子弟もいる。まさにAの小野沢貞之助のつながりが濃厚である。

おそらく師匠幽学の夢を現実のものにしたものの幽学とともにこの世から消滅した改心楼のかつての華やかさを後世に伝えようと小野沢六左衛門に連なる人物が、絵師凍調に描かせたものであろう。

改心楼は松杉の木の間隠れに丘陵を切り拓いて建つ。下方にはのどかな田園風景がひろがる。取り入れが終わって馬の背に実りをのせ鋤をかついだ農夫とその子弟が家路を辿る。長部村の農家の佇まいから山を削り切開された坂道を登り、いくつもの門をくぐって柴の戸を推すと手入れの行き届いた広大な庭に達する。そこには重厚な母屋と屋根から煙を出す副屋・物置・雪隠等の付属施設が垣に囲まれてあり、落ち着いた風情を漂わせている。

田面から一段登ったところ、改心楼からは一段下ったところには天保十三年（一八四二）に建設された幽学の住居が四囲の環境に調和して存在している。このように長部村の八石といわれた丘陵を削っては埋め、ときには掘ったりして大規模な地行普請土木工事によって築造された敷地に、幽学の性理学教団の一大殿堂が建立され、荘厳な佇まいが一幅の絵画に収められて、今その余香を伝えてくれているのである。

衆目を驚かした改心楼の大きさは下方の農家、幽学の住居と比較すれば一目瞭然である。家屋敷のみならず地を穿ち、あるいは埋め均し一大教堂をつくりあげた幽学教団の実力・力量を誇示していると見てもよい。いまだ改心楼の実体を具体的に知りたいものである。図面がひとつぐらいもあるはずである。目下のところ改心楼のかつての姿を正確に伝えてくれる図面は発見できないままである。しかし大原幽学全集（一九四三）に遠藤家所蔵の平面図が掲載されている。これのみが手がかりになるが、縮小された写真版のため詳細は読解できない。それでも絵画資料二点を含め改心楼のおおよそは把握できようである。

改心楼の主屋は間口七間・奥行五間の規模であった。内部は通常の民家と違って五間三間の講堂ともいうべき、おそらく板敷きの大広間を有していた。中央には幽学の高座が設けられ、数十人規模の道友の収容が可能であり、儀式はもとよりいつでも講義説法ができるようにつくられていた。

講堂の北側には一二丈ほど畳敷きの広間があり、この部分の屋根は瓦葺である。左隣には蒲団部屋がしつらえられている。独立したこんな大きな蒲団収蔵専用の部屋の存在は道友関係者の宿泊においては考えられない。

座敷につづき台所と思しき空間がある。絵画資料では煙を出していた部屋と考えられる。土間の竈等から煮炊き一〇〇人規模の炊事を賄うものであったことがうかがわれる。

講堂の大広間の左側（西側）にはやや張り出して戸障子・襖に仕切られた三畳二間がある。改心楼を統轄する性理学教団の当事者が常駐する事務機能をもつ居間であったのであろう。

雪隠は主屋から離れ東側に六カ所置かれた。一〇〇人規模の集会、宿泊を前提としたしつらえである。このように江戸時代の建築に素人の者にも、改心楼の異様さは読みとれる。改心楼の建築は、領主支配の厳しいといわれる幕藩制の硬構造において許容されるものであったのである。まず、湧いて来る素朴な疑問である。

改心楼はいかにして成ったのか。第一次資料ともいえるべき大普請の過程を道友の献身丹精の奉仕による人足の動員・建築資材の調達や大工左官その他職人の雇用等の諸実費を記帳した関連資料から究明する。まず幽学弾圧の口実にされたといわれた改心楼建設の真実を明らかにすることから始めなければならない。

改心楼建築の詳しい実態に迫る前に典拠とする関連資料を紹介しておきたい。表1に明らかなように目下大原幽学記念館が所蔵する四三点で

表1 改心楼建設関係資料

	表 題	年 月 日	西暦
1	改心楼材木持寄控	嘉永2年4月24日	1849
2	材木控	嘉永2年4月24日	1849
3	一番会合所寄進人足控	嘉永2年4月	1849
4	改心楼材木寄進控	嘉永2年4月24日	1849
5	材木注文控	(嘉永2年4月24日)	1849
6	改心楼材木持寄控	嘉永2年4月	1849
7	普請懸り当座控	嘉永2年4月	1849
8	二番 会合所寄進人足控	嘉永2年5月	1849
9	三番 会合所寄進人足控	嘉永2年5月	1849
10	四番 会合所寄進人足控(表紙のみ)	嘉永2年6月	1849
11	五番 会合所寄進人足控(〆)	嘉永2年6月	1849
12	六番 会合所寄進人足控(〆)	嘉永2年7月	1849
13	材木掛人足控(〆)	嘉永2年6月	1849
14	式番 材木掛人足控(〆)	嘉永2年7月	1849
15	会合所大工方控	嘉永2年閏9月	1849
16	七番 土普請人足控	(嘉永2) 西9月29日～10月5日	1849
17	八番 土普請人足控	(嘉永2年10月)	1849
18	九番 普請人足控	(嘉永2年) 10月6日	1849
19	十番 土普請人足控	(嘉永2年) 10月10日	1849
20	普請当座控	嘉永2年10月	1849
21	十一番 地形人足控	(嘉永2年) 11月2日	1849
22	十二番 地形人足控	嘉永2年11月10日	1849
23	十三番 会合所普請人足控	嘉永2年11月16日	1849
24	式番 普請掛当座控	嘉永2年11月24日	1849
25	十四番 会合所普請人足控	嘉永2年11月27日	1849
26	十五番 改心楼普請人足控	嘉永3年正月13日	1850
27	十六番 改心楼普請人足控	嘉永3年2月5日	1850
28	十七番 改心楼人足控 但拾三番より拾七番迄	嘉永3年2月18日	1850
29	改心楼籠家掛	嘉永3年正月24日	1850
30	改心楼開設諸調録	嘉永3年正月	1850
31	改心楼夜具并蚊帳仕立人数	嘉永3年2月7日	1850
32	三番 普請掛当座控	嘉永3年3月17日	1850
33	石工・経師手間控	嘉永3年6月	1850
34	銚子石受取控	嘉永3年6月	1850
35	改心楼普請入用控	嘉永3年6月17日	1850
36	改心楼蚊屋木綿控	嘉永3年6月17日	1850
37	石注文控	嘉永3年12月	1850
38	改心楼勝手賄控	嘉永4年3月	1851
39	片付仕事人数控	嘉永5年正月2日	1852
40	切通丹精人数控	嘉永5年正月2日	1852
41	地行場均人数控 二	嘉永5年正月16日	1852
42	地行場均人数控 三	嘉永5年2月24日	1852
43	地行場均人数控 四	嘉永5年閏2月22日	1852

ある。殆どが建築の種々工程のなかで作成されたもので記載に明確さを欠くところもあるが後年編さんされたものと違い、実情を余すところなく伝えるものとしては第一次資料であり、信憑性は高い。

①改心楼建築の工程——出来上がるまで

「絵図面定井材木見立」

改心楼の建築は嘉永二年（一八四九）四月十五日の「絵図面定井材木見立」の記事からである。それは「一番会合所寄進人足控」の冒頭にある。

始

四月十五日

良左衛門殿

一 絵図面定

治郎左衛門殿

井材木見立

又左衛門殿

佐重殿

七郎右衛門殿

同十六日

一 材木見立

良左衛門殿

治郎左衛門殿

佐重殿

又左衛門殿

七郎右衛門殿

四月十五日、長部村の良左衛門、治郎左衛門、入野村の佐重、諸徳寺村の又左衛門、七郎右衛門のいずれも幽学の高弟五人が「会合所」（このとき「改心楼」と呼んでいない）の「絵図面」（設計図）を確定し、翌十六日にかけて早速資材の材木調達を検討したというのである。五人は幽学を長部村に定着させ、先祖組合結成による一大改革を推進した東

総グループの重鎮である。おそらく幽学の意向は以心伝心で五人の胸中に反映されていたのであろう。

絵図面の作成と揆を二にして材木調達の検討に入っており、長部村を中心に道友からの寄進が募られ、その明細がまとめられていった。四月二十四日、正式に道友の「改心楼」「持寄」が決まった材木は表2のようである。松五三本、杉一四〇本、椎二本、それぞれに大小があるが合計すると一九五本にのぼる。建築現場となる長部村が一六名で松二四本、杉一〇六本、椎二本で大半を占める。更に長部村持ちの鎮守・寺から松七本、杉三本を供出し、並木の松五本まで伐り出そうという算段である。個人では諸徳寺村の又左衛門、長部村の伊兵衛（良左衛門の父）の寄進が顕著である。かくして性理学会の道友の「会合所」は即「改心楼」と魂が入れられ、道友の寄進にもとづく丹誠で建築するという意志の証明として自らの家産である材木一九五本を持ち寄ることにしたのである。また同日に「材木建具入用調」が、五人のうち諸徳寺村の七郎右衛門に代わって又左衛門の弟幸左衛門が加わって行われた。道友が持ち寄る材木で充分なのか。ここに表立たないが改心楼の建立に最も意欲を燃やす幽学が登場する。そして「材木買揃」が「大先生」によって決定された。自前の資材だけでは到底幽学を満足させることは出来ない。木材その他世間に通ずる幽学の意向で、江戸深川辺で金銭で調達することになるのである。

かくして「改心楼」本体の建築のメドはついたが、改心楼の建つ地所は長部村名主伊兵衛の持林八石の山中にあった。大規模な基礎工事が不可欠であった。一見困難と思われる大工事であるが、道友たちにとっては幽学への思い、村落の改革、己の悔い改めの証として最も得意とする丹誠・修業の場、機会であった。

表3 土普請寄進人足（嘉永4年閏4月30日～）

日付	村											名										
	長部	諸徳寺	鎗木	野田	米込	小川	岡飯田	上総屋形	布野	稲荷入	十日市場	足川	新町	小貝野	平山	府馬	阿玉台	桜井	琴田	溝原	田部	米之井
閏4.3	3																					
閏4.8	3																					
閏4.10	12																					
閏4.16	12																					
閏4.17	37	10	6	6	5	3	1				1											
5.1	14																					
5.2	15	12	1	6	5	3	2	1														
5.3	16	13		5	6	3	3	1														
5.4	19	14		5	5	4	3	1														
5.7	5						8		7	1												
5.8	4	6			3						4											
5.9	3	6			3						5	1	1									
5.12	3	4									1											
5.13	25	15			6		9		1	1				2	1	1						
9.29	7	18		4	5	1																
9.30	8	21		4	6	1	1									1						
10.1	9	22		4	7	3	8		5					1			1	1	8			
10.2	11	18	2	6	10	3	8		5	4	5			1		3	2	2	5	3		
10.3	17	18	2	6	10	3	6		4	4	4			1	1	5		1		1		
10.5	20	15	4	5	8	3	6		5		4			1	1	3					1	1
10.6	21	14	3	5	8	3	5		2	2	4			1	1	3						2
10.7	25	20		5	9	2	4		4	2	3			1	1	3						1
10.8	30	22		5	9	3	8		4	3	4			1	1	3						
10.9	30	19	1		10	4	5		4	3	4			1	1	3						
10.10	29	19	2	4	10	2	3		4	3	4			1	1							
計	378	286	21	70	125	41	80	3	45	23	43	1	1	11	8	25	3	4	13	4	1	4

関係資料—3、8～12、16～19

閏四月、五月の一四日間四四六人と九月末から十月上旬の一日間八一二人で土普請はほぼ完了したものと思われる。それにしても生業の暇を利用しての人足の動員であつたろうが、性学教団の組織力と統制は見事であつた。

長部村と諸徳寺村を中心に周辺の村々の構成である。村々を地図上に落としたのが図1である。地元の長部村、諸徳寺村はさておき、周辺とはいえ他村の道友は早朝から日没まで大変な労役であつたと考えられる。しかも、これは道友としての自己

された。注目すべき水道工事である。以降九月二十九日まで土普請他改心楼関係の記録は見当たらない。六月、七月分の「寄進人足控」は表紙のみで中身はない。生業との関係で工事は中断したのか、資料が散逸したのか不明である。しかし、改心楼の敷地を造成するという「土普請」はほぼ峠を越したことは十分推測出来る。

九月二十九日再開した土普請は十月に入ると二一カ村から八〇から九〇人の人足を動員して仕上げにかかった。「土手取」「芝張」「土手積」「水ノ手」「塊積」「岩取」「くれ取」等それぞれ行われ、改心楼建築の基礎工事はほぼ終わったとみてよい。

閏四月三日から十月十日まで二五日間、土普請の二四カ村の寄進人足はのべ二五八人に達する。「仕舞」とされた十月十日には九月二十九日から一二日間惣人数九〇二人であつたと記録しており、表3の一日間八一二人より一日と九〇人多い。のこされた控帳とは正確に合致しない。おそらく表3を上回る人足数であつたことがうかがわれる。交代制の世話役等によって記帳されたためか、欠落はじめ村名、人名、それに計算に誤りが認められるが、改心楼の建築の推移を知る上ではさして支障とはならない。

高部	青馬	出席 (世話役)	小計
			3
			3
			12
		6	18
		7	76
			14
		7	52
		7	54
		7	58
		3	24
		3	20
		4	23
		4	12
		16	77
			35
			42
			69
			88
			83
1			78
1			75
			80
	1		94
	1		86
			82
2	2	64	1258

表2 改心楼道友材木持寄明細（嘉永2年4月24日）

寄進者名（村）	材 木		
	松	杣	椎
1 伝藏（米込村）	9本（4尺3寸～4尺2寸～4尺）		
2 又左衛門（諸徳寺村）	5本（7尺1本、4尺3寸1本）	31本	
3 佐兵衛（長部村）	3本（5尺1本）	1本	
4 七郎右エ門（諸徳寺村）	3本（5尺1本、4尺1本）		
5 桜井		3本	
●6 伊兵衛（長部村）名主	3本	30本	
●7 源兵衛（ 〃 ）組頭	1本	15本	
●8 惣右衛門（ 〃 ）	1本（5尺3寸）	25本	
●9 仁右衛門（ 〃 ）百姓代	3本（1丈2寸1本）	6本	
●10 新左衛門（ 〃 ）	1本（4尺6寸）	6本	1本（4尺）
11 市右衛門（ 〃 ）		1本	
12 太左衛門（ 〃 ）		5本	
●13 政右衛門（ 〃 ）		3本	
14 新右衛門（ 〃 ）			1本（5尺）
15 四郎右衛門（ 〃 ）	9本		
16 治郎右衛門（ 〃 ）	1本		
●17 吉兵衛（ 〃 ）		7本	
●18 五兵衛（ 〃 ）	1本		
●19 治兵衛（ 〃 ）		4本	
20 鎮守（ 〃 ）	7本（5尺1本、4尺4本）		
21 寺（ 〃 ）		3本	
●22 忠右衛門（ 〃 ）	1本		
23 なみ木（長部村内並木）	5本（5尺～5尺3寸2）		
小計	53本	140本	2本

●天保11年の道友議定誓約参加者
 関係資料1～6から作成。

「土普請」

閏四月三日から改心楼のための土台工事「土普請」が着手された。一応の「土普請仕上」げまでの寄進人足動員の明細をまとめたのが表3である。まず土普請の工程を追ってみよう。

閏四月三日と八日は「裏新道拵」、これからの大工事に備えてか改心楼に裏に通ずる新道をつくっている。人足は一日三人である。十日からいよいよ「地形土普請」の、改心楼の敷地工事にとりかかる。初日は長部村の道友一二人が行った。多くは若者である。六日置いた四月十六、十七の両日「土普請」「土普請下拵」がそれぞれ一八人、七六人を動員して行われた。土普請には多くの労働力を投入する必要があり、農閑期を縫って計画的に行わなければならない。四月十七日には長部村の他に諸徳寺、鎗木、野田、米込各村等の道友が参加し、村毎に道友を編成、組織する性学教団特有の改心楼建設方式が始まった。半月の小休止を置いて五月に入ると雨中地行普請は長部村の一四名で再開され、以降十三日まで九日間行われた。動員された人足は「見習以上」と格付けされた若者で、技量よりは腕力で山を削り、谷を埋めるに適した力自慢のものたちであつた。また五月三日、雨のため、六ツ半（七時）作業を再開したものの大雨となつて、四ツ（十時）に止むを得ず中止している。ようやく雨が止んだ翌四日には五八人が参加した。村単位に動員された人足の中には「弁当運」の「助」が含まれることもあつた。多くは老人で力仕事は無理でもせめて作業現場まで弁当と湯茶を運搬しようとする丹誠の労働力であつた。

五月十二日には「土手築揚」にかかり、翌十三日には七七人中二八人を投じて「地形踏均」、敷地の地固めが行われ、十五・十六・十八日の三日間（十七日は先祖組合領主お墨付記念休日）、米込村や鎗木村の休日を返上した若者による「裏通土手直下水道拵立」「上水道拵并二築山拵」「裏土手拵」等の付帯工事が継続



図1 改心楼造営寄進の村々

を磨く丹誠の奉仕であって日雇いではないのである。

改心楼の建築—大工方

未だ地行普請途中の九月二十日改心楼本体建築の見積りが性学教団一統の立合の下で普請に当たる神田村の大工棟梁との間に行われた。「普請仕揚并雪隠仕揚」、本体に雪隠（便所）を含めて大工方の「惣手間」

は金二三両と扶持玄米二三俵と取り決められていた。早速棟梁に金一両の手付が渡された。以降翌嘉永三年（一八五〇）三月十二日まで扶持米代を含め金五二両二分二朱錢八八文の手間代が棟梁を通して表4のような労働の対価として支払われた。神田村の棟梁の配下一四名と増普請等の臨時の大工一四名の二八名の九五九人前（一人前の大工一人で九五九日かかる計算）手間で改心楼と雪隠は建てられたことになる。

見積金の金二三両と扶持玄米二三俵は（二俵〇・六五両で換算すると約一五両）約三八両となり、決算高五二両二分二朱錢八八文は一四両余の予算オーバーとなった。これで驚いてはいけない。嘉永四年三月の総決算では大工方は金七四両一分二朱にまでのぼっており、祝儀酒手として金二一両三分余が予算オーバーとなっている。仕事始、棟上げ、細工仕舞等はひとつの神事であり、神酒、祝儀はつきものであった。

それにしても別途八両を「大工請取前仕上二相成、格別余分利得も無之様子ニ付改心楼普請事故又々外二遣」と儲けがない様子だったので改心楼の普請に携わったのだからと特別に与えている。大工が不満がないようにとの改心楼の微妙な建築への配慮を示している。

屋根・畳・石工・左官

十月二十日の仕事始めから約一カ月後の十一月二十三日、棟上を前に大先生幽学は良左衛門をともなつて漸く姿を現した「改心楼」を検分する。この夜長部村の道友茂十郎宅で一五人の道友が参集して「棟揚」の「餅搗」を催した。かくして十二月二十五日「建上」（棟上）が盛大に執り行われた。この日は六一人の人足が棟上に専念し、大工方に金三両一分の御酒料を供している。大工方の工事と並行して屋根、そして本体改心楼の内装の左官、外囲りの石工が同時に進行する。

十一月朔日から屋根葺きに先行して茅刈りが道友人足で始まり、十七日から二十四日まで八日間六七駄（五〇人）の茅が運び込まれた。

表4 大工方の手間

大工名		期 間	実働分 (1日1人)
和田村 桜井村 万才村 万才村 飯岡	棟梁	嘉永 2 年 10.20～3.2.14	91
	元吉	嘉永 2 年 10.20～3.2.13	98.5
	久蔵	嘉永 2 年 10.22～3.1.18	75.5
	惣治	嘉永 2 年 10.22～3.2.13	59.5
	惣兵衛	嘉永 2 年 10.23～3.2.13	77
	嘉兵衛	嘉永 2 年 10.24～3.1.15	46.5
	秀吉	嘉永 2 年 10.24～2.12.13	36.5
	忠兵衛	嘉永 2 年 10.28～3.1.29	84
	栄蔵	嘉永 2 年 11.1～3.2.11	79.5
	泰蔵	嘉永 2 年 11.2～3.2.3	47.5
万才村	衆蔵	嘉永 2 年 11.4～3.2.13	56
岡飯田	直七	嘉永 2 年 11.20～3.1.18	21
岡飯田	庄助	嘉永 2 年 11.20～3.2.11	57
万才村	仙蔵	嘉永 2 年 12.16～3.2.13	18
鍋木村	大工 5 人	嘉永 2 年 2.12.20～22	12.5
上総	大工 1 人	嘉永 2 年 12.27～3.1.15	19
神田村	文蔵	嘉永 3 年 1.6～18	10
弟子	源蔵	嘉永 3 年 1.6～18	11
府馬村	大工 4 人	嘉永 3 年 1.29～2.11	47
溝原村	忠蔵	嘉永 3 年 2.6～13	7
飯岡村	子供	嘉永 3 年 2.7～12	(4.5)
小計			959 人

関係資料—15

棟上翌日二十六日から屋根工事が本格化し、「足しろかけ」「足代板」が諸徳寺村から運ばれ、「屋根地拵」が行われた。十二月三日には屋根屋が入り、道友人足は「手伝」と「屋根ふき」（茅を手渡しする）に当たっている。十二月四日は四〇人の人足が充当され六日に終わったが、茅手棟梁等の手間や酒代に金四兩二分錢二貫五七六文を要している。畳は新町の畳屋伊助・熊五郎両名に十月二十六日金三兩一分渡しして注文、十二月二十一日は琉球表三五枚（銀一〇五匁）早嶋表八枚（三二匁）を購入。歳末の二十九日は酒手二朱を贈っている。改心楼開校の五日前の十四日には「敷込」が行われ、酒手錢五〇〇文をはずんだ。購入された畳は四二畳半代金五兩一分三朱にのぼり、これらを新町の畳屋伊助と熊五郎が一兩三分二朱の手間で敷き込んだ。

嘉永四年三月の総決算では琉球表二兩二分二朱余、畳表方金七兩三分余の約一〇兩の費用と計上されている。

石工は鍋木村石屋が十二月十二日、府馬村の石屋翌十二日から二十一

日まで二人で一六日半の仕事をこなしている。翌年正月三十日から一日間は鍋木村石屋が継続した。なおその後も改心楼の外周工事のなかで二人の仕事は続けられ、嘉永四年三月、手間と酒手に金二兩二分一朱を要した。

問題は改心楼摘発の一因となった建築資材「石」の使用である。道友の多くが持ち寄ったのは「石くづ」であったが、改心楼の整備が進むなかで銚子石を発注して嘉永三年六月から買っている。運搬には道友が馬を出して奉仕している。

また別途嘉永三年八月江戸にて「伊豆石」（三六枚）を発注・購入しており、利根川舟運で小見川河岸辺に着いた石を馬方、牛方を雇って改心楼まで陸路運送した。因みに牛方は新里村、馬方は小見川、小見、下小堀各村の百姓である。

嘉永四年三月の決算書銚子の切石代金一四兩三分二朱と錢四貫六四六文、この運賃歳敷が一兩と五貫五二文にのぼる。他は一兩二分の水鉢である。不思議にも伊豆石の代金は計上されていない。贅沢な伊豆石を江戸からわざわざ買い送らせたことを、公儀その他に秘しておきたかったからであろう。

左官は嘉永三年二月二十六日大久保村の左官に手間代金三分、酒手二朱、同じく三月二十四日二分二朱が渡されている。嘉永四年三月の決算では手間代金二兩と錢八五文、酒手一分四〇〇文となっている。

蒲団と蚊帳（屋）

改心楼は道友関係者の宿泊をも充足する教会、学校でもあった。このことは改心楼の建設施設の整備に顕著に認められることである。ひとつは多量多額の綿の購入である。いまひとつは「蒲団縫、蚊帳縫」への女性道友の丹精である。

表 5 改心楼蒲団縫・蚊屋縫（嘉永 3 年）

日付	村 名															
	長部	諸徳寺	十日市場	足川	米込	岡飯田	布野	野田	小川	小貝野	稲荷入	府馬	鎌木	阿玉台	平山	桜井
2.7	5(1)	6(2)	2	1	2(1)	3(1)	1	1	1	1	2	1	2	1		
2.8	7	5(1)			2(1)	2	2(1)	1	1	1		1(1)	4	1		
2.9	1(1)	2(1)	1(1)		1(1)		1			1						
3.29	2(1)	2(2)	1		1(1)	1	1			1						
4.1	7(1)	6(1)	3		5	6(3)	4(1)		1	1		1	2		1	2
4.2	15(9)	7(1)	5(1)	1	3(2)	5	5(2)	2	1	1		1	4	2		3(1)
6.20	4(1)	3	1	1	2	2	1	1		1		1		1		
6.21	4(1)	5(1)	1	1	2	2	1		2(1)	1		1	2	1		
6.27	7(1)	5(2)	2(1)	1(1)	2(1)	2	2(1)	1	2(1)	1		1	3	1		
8.15	1	2(2)	1		1(1)	1	1			1						
8.16	4(1)	5(2)	2	1	2(1)	3	2	1	1	1	1	1	1	1		
8.17	4	4(2)	2	1	2(1)	1	2		1	1		1		1		
8.18	1(1)	2(1)	2		1(1)	1	2			1						
8.19	1(1)	2(2)	2		1(1)		1			1						
嘉永 4 年2.26	1(1)	1(1)	1		1(1)	7(1)	3			1	1					
計	64(20)	57(21)	26(3)	7(1)	28(13)	36(5)	29(5)	7	10(2)	15	4	9(1)	18	9	1	5(1)

※（ ）内は娘人数 関係資料—31

	小計	仕事の内容
	29 (5)	蒲団縫
	27 (4)	蒲団縫
	7 (4)	跡始末
	9 (4)	二度目蒲団縫仕度
	39 (6)	二度目蒲団縫
2	57 (16)	二度目蒲団縫
	18 (1)	蚊屋糸調同はたへ仕業
	23 (3)	蚊屋はたへ仕業
	30 (8)	蚊張之もへき染
	8 (3)	蚊屋縫
	26 (4)	蚊屋縫
	20 (3)	蚊屋縫
	10 (3)	蚊屋縫
	8 (4)	修役之蚊屋迄縫仕舞也
	16 (4)	
2	327 (72)	

嘉永三年（一八五〇）二月七日真綿を金一両二分余買ったのを手始めに翌日には「坂上銘綿大人四本を銀一貫五六九匁（両に六四匁で約二五両）、「地綿極上五貫目入二本」を銀四〇五匁四分（六・三両）、真綿二五〇目を六〇匁（一両）で買い込んでいます。この綿の多くは蒲団と蚊帳に使われた。嘉永四年三月次の決算では綿に投下された金額は八〇両三分二朱、錢二三四文にも達している。寝泊まりする、出来るという機能を幽学が如何に重視していたかを物語っている。

また、山中に忽然と誕生した改心楼は蚊蚊の格好の棲息地であったのであろう。大掛かりな木綿を使った蚊帳の仕立てを行っている。蚊帳木綿だけで五〇反にも及んでいる。

これら大量の綿を蒲団や蚊帳に廻らせたのが道友の女性たちであった。母、妻、娘が一体となって男子道友の土普請その他に負けじと嘉永三年二月七日から八月十九日まで一四日間奉仕して、これに当たっている。村毎に状況をまとめたものが表 5 である。

延三七人、一日当たり平均二三人、七八パーセントを母、妻が占める。のこりは娘である。男子道友の寄進人足と同じ様に長部、諸徳寺を中心に一七カ村の道友女性が参加している。

道友関係のすべてが老若男女問わず献身奉仕した改心楼の建立に女性の力量をみせつけた一大事であったろう。

因みにこのとき縫われた蒲団を長さで分類すると六尺五寸（約一八七

センチ）一八枚、五尺一寸（約一五五センチ）が四〇枚、「馬乗」二尺（約六七センチ）五枚である。長い方が大人、短いものが子供用ということになるか。子供大会や取替子制を前提に性理学校開校を目指していた幽学の意向が生かされている。それにつけても完成直後の改心楼の大広間に二十数人の女たちが集まって針や糸を使い蒲団や蚊帳を縫う光景は異様であつたらう。

改心楼の開校とその後

正月十一日から長部村の道友を中心に改心楼開設の祝賀に向けて準備が始まった。

当日の祝いのため道友二九人半が一人分金三分二朱錢四〇〇文を分担して金二七両二分錢四四二文を拠出して準備に当たった。料理、調度品が買い揃えられた。彼らは道友のなかでは見習の若者である。いかに大がかりの祝賀行事であつたかは「割はし四百前」「柳箸二百四十前」「草履百五十足」「白米五俵」（金三両二分二朱錢四七〇文）「糯米六斗」（金一両三朱錢四七〇文）の数字から窺い知ることが出来る。

正月十七・十八の両日が支度に充てられ、いよいよ十九日開校の運びとなった。一〇〇人を越える老若男女の道友が駆けつけたであろう。翌二十日が「主人分乏者」、二十二日が「女共」と祝典がつづき、二十三日に「開校跡取纏」と跡始末が行われた。

改心楼の開校とは学校の開校ということと道友のための会合所、教団の殿堂が落成したことを祝う意味があつた。

確かに改心楼建設のひとつの画期は嘉永三年正月十九日開校にある。しかし、これで完成したわけではない。とりあえず、性理学教団の幽学の講話等の諸儀礼や学校の機能を充足したに過ぎない。教団の本拠の殿堂たらんとするには、周辺環境の整備と内装の充実が未完である。これらは嘉永五年四月十八日の関東取締出役の指金による改心楼乱入事件ま

でつづけられた。

②改心楼建設の異様

人足と建築費の寄進

改心楼建設の異様さは、まず進んで「土普請」その他の労働に奉仕した道友と家族の献身のすさまじさである。彼らは支配者に強制的に駆り出されたのではなく、また共同体の役務として労役を負担したわけでもなかった。幽学の教えに感服し、自発的に参加したのである。嘉永二年（一八四九）四月から一応の完成をみる翌三年三月までの道友寄進人足をまとめてみたのが表 6 である。

ほぼ一年間の実働一八〇日で延べ四四三二人にのぼる。一日平均二四・六人が奉仕したことになる。多いときで九〇人台、常時数十人の道友が改心楼建設の土木工事に従事していたことになる。

長部村名主伊兵衛の持地で続けられた建設工事に工程によって多少の差があるが、周辺二十数カ村から早朝数十人が駆け付けてきたのである。

表 6 改心楼建設道友寄進人足の明細

年月（日数）	人足（人）	人足数／日
嘉永 2 年 4 月（3）	18	6.0
嘉永 2 年 閏 4 月（5）	126	25.2
嘉永 2 年 5 月（12）	381	31.8
嘉永 2 年 6 月（0）	不明 記録なし	—
嘉永 2 年 7 月（0）	不明 記録なし	—
嘉永 2 年 8 月（0）	不明 記録なし	—
嘉永 2 年 9 月（2）	77	38.5
嘉永 2 年 10 月（30）	991	33.0
嘉永 2 年 11 月（29）	1083	37.3
嘉永 2 年 12 月（27）	389	14.4
嘉永 3 年 正月（26）	454	17.5
嘉永 3 年 2 月（29）	604	20.8
嘉永 3 年 3 月（17）	309	18.2
計 180 日	4432	平均 24.6

表7 江戸訴訟提出改心楼建設費用（嘉永3年6月17日改）

品 目	金 額
材木代（赤松・梅）	10 両 3 分 2 朱 銀 3 匁
杉板	1 両 1 分
戸障子不残	13 両 2 分 銀 7 匁
改心楼井=雪隠仕揚共大工手間	26 両
米 26 俵大工扶持分	13 両
家根屋普請	2 両
米 2 俵家根屋扶持	1 両
左官手間	2 両 錢 85 文
畳 50 畳半	6 両 1 分 錢 400 文
畳表	2 両 2 分 2 朱 錢 518 文
畳差手間	1 両 3 分 2 朱 錢 160 文
竹代	3 両
釘井=金物代	11 両 2 分 2 朱 錢 263 文
瓦代	4 両 1 分 銀 7 匁
計	99 両 1 分 銀 17 匁 錢 1 貫 426 文

普請金立替

名 前	村 名	金額(両)
伊兵衛	十日市場	30
又左衛門	諸徳寺	20
良左衛門	長部	20
伝蔵	米込	10
平太郎	岡飯田	10
庄左衛門	野田	5
茂兵衛	小見川	5
啓一郎	鍋木	5
金次郎	足川	10
計		115

関係資料35より作成。

性理学教団外の人々からみれば余程、異様に見えたとしても不思議はない。この村境、しかも領主支配の壁を越えて延べとはいえ四四三二人もの労働力を結集させた教祖ともいべき幽学という人物に関心が集中していったのも自然の成り行きである。

改心楼は道友の奉仕の労働だけで竣工したわけではない。勿論資材費といい、大工その他職人の手間代や楼内の家具調度等お金で賄ったものも少なくないのである。

一体全体、改心楼建設にどのくらいの費用を要したのか。従来の大原幽学研究は「牛渡村一件」の江戸訴訟の際に作成、勘定奉行に提出された嘉永三年（一八五〇）六月十七日改の「為後世江置」、後世のために

記し置かれたとされる「改心楼普請入用扣」をのみ信頼してきた。内訳を表7にまとめたように総額九九両一分、銀一七匁、錢一貫四二六文の建設費と、これを嘉永五年正月九名の有力道友が金一一五両を出資して立て替えたというのである。この数字を鵜呑みにしてきたのである。

ところが関連資料を追求していったところ、実際はこれに四倍する数字であることが明らかになった。九カ月後の嘉永四年三月の「改心楼勝手賄控」によれば表8のような内訳となり、総額は金四四八両一朱、錢一一貫二七二文、約四五〇両に達している。九カ月の隔たりがあるものの四・五倍の違いというのはどう考えてもおかしい。

前者は江戸訴訟の主要の争点のひとつとなった改心楼の建築を質素に

表8 改心楼建設費用（嘉永4年3月）

品 目	金 額
大工方	74 両 1 分 2 朱 錢 1 貫 626 文
綿	80 両 3 分 2 朱 錢 234 文
石	19 両 1 分 2 朱 錢 633 文
琉球表	2 両 2 分 2 朱 錢 518 文
石屋手間	2 両 2 分 1 朱
左官手間	2 両 1 分 錢 485 文
屋根屋	4 両 2 分 錢 2 貫 576 文
畳屋	7 両 3 分 錢 92 文
材木	93 両 3 分 錢 538 文
竈家掛	20 両 2 朱 錢 432 文
屋根茅	3 両 1 分
家財道具	62 両 2 分 2 朱
遣道具	22 両 3 分 2 朱 錢 126 文
釘	10 両 錢 472 文
鍛冶屋細工	8 両 2 分 2 朱 錢 531 文
赤銅	7 両 2 分 2 朱 錢 400 文
諸雑用	21 両 1 分 2 朱 錢 85 文
改心楼食料	3 両 2 分 錢 2 貫 524 文
計	448 両 1 朱 錢 11 貫 272 文

関係資料38より作成。

見せようとする意図が働いており、数字を不当に低く改竄したのである。訴訟に備えて公式文書にして作成されたため、あまりに整然とした淡泊なつくりである。

後者は丹精をモットーとする教団内部の道友の公正さの中で記帳されたもので、前者に比べて雑然とはしているがそれだけに真実を伝えており、信憑性は高いといわざるを得ない。

表8が実態に近いとすれば、改心楼は道友の四四三二人の無料奉仕に加えて金四五〇両もの大金が投資された、それなりに華やかな大普請であつたのである。

材木代九三両余（前者では一一両弱）綿八〇両余（前者には記載なし）家財道具六二両余（前者には記載なし）が一見して目に付く顕著な差異である。いずれも、幽学摘発の端緒となつた「大造に花麗なふしん」「多分」の「入用」「先生（幽学）」の「立派なふとん」、「大きなかなたらしい」の風聞の根拠になつたものである。関東取締出役の集めた情報はまんざら嘘ではなかつたことにもなる。

質素倹約のシンボルのように言われる改心楼ではあるが、江戸後期に

盛り上がる民衆の消費の趨勢から逃れることは出来なかつたのである。村落の改革、家の復興、日々の悔い改めのスローガンはそれとして改心楼の建設費は下総地域の村落社会にあつて誰もが注目した華麗なパフォーマンスであつた。それだけに為政者を刺激することになった。

支配領主との関係―領主は改心楼建設を許可したのか

改心楼のようなこんな大がかりな普請を支配領主は黙って見過ごしたのか、正式に許可したのかという素朴な疑問が湧いてくる。

まず長部村名主伊兵衛の持地とはいえ、八石という山林を切り開き、大規模な土普請、地行普請を行い、そこに間口七間、奥行き五間の会合所改心楼を建築したのである。まず開発、次に建築の許可申請が必要であらう。また、おそらく工事は拡大し、新たに田面の開発の修正にまで及んだのであらう。これは幕藩制支配の根幹に年貢地（検地帳に登載された縄請地）の勝手な地目その他変更に当たる。

それにも増して問題となるのは前にも触れた改心楼の建設が二十数カ村に所属する百姓身分の道友を動員した大工事だったことである。長部村の名主伊兵衛家の普請では到底なく、長部村一村の主催するものでもない。村々の境界を越えたのみならず、支配領主の領界を無視して実行されたのである。実質上、性理学教団のリーダー長部村名主見習良左衛門、諸徳寺村の又左衛門等はどうに対処しようとしていたのであらうか。

浪人大原幽学を自家の屋敷に止め先祖組合の結成、住宅まで提供し、自村のみならず周辺他村への布教活動の一大拠点となろうとした長部村は、支配領主御三卿清水家と良好な関係をつくりあげていた。

天保十一年（一八四〇）四月には、一大家族が議定誓約のうえ先祖組合の承認を清水家御領知方御役所に願ひ出、「聞届」とはならなかつたが、八月十七日「前書見置候也」の裏判を頂戴した。これ以降、長部村

では八月十七日をお墨付記念日として毎月十七日を休日とし、お墨付を拜んでいる。

先祖組合の仕法の実績が着実にあがった八年後の弘化五年（一八四八）二月、領主清水家の領知方役所から名主伊兵衛が銀三枚（一枚四三匁で一二九匁）、組頭源兵衛と惣右衛門が各一枚（四三匁）、百姓代太兵衛が金一〇〇匁（一分）、小前一同が五〇〇匁（一兩一分）褒美として下賜された。領主の異例の褒賞は長部村の模範的村立て直しの実績と村政の安定によるものであった。かつて長部村は「村方之儀山寄鹿田二而其上追々困窮二陥り、退転之もの多往々可及亡村与村柄」山寄りの地で荒田ばかりで、その上困窮に陥り、村を出る者が多くて村が亡びるような状況であった。これを名主・組頭・百姓代の村役が小前一同を教え諭し、潰れ百姓を取り立てるなど村の立て直しに成功した。奇特の至りである、よって御褒美を下さるというのである。領主清水家から見た長部村の立て直しは驚嘆に価するものであった。

村柄立て直し方議定相定メ、一同昼夜不厭農業之外餘稼をも出情いたし、餘稼金銭積立、質入田畑皆請戻、猶餘金を以潰百姓数軒取立、右二も一粒一錢之拝借并御手当も不相願、且又御年貢筋等御触日限りも早く上納、飢饉之節夫食拝借等も苦勞二致し、違作之年柄も返納いたし、公事出入無之、小前一同質朴二而万端和熟之村方二有之村を立て直すために一同で議定（方針）を定め、その通りに実行、昼であろが夜であろが本業の農業はもとより余業に精出し、稼いだ金を積み立てては入質していた田畑を請け戻し、なお余った金を投下して潰百姓を数軒取り立てている。それでいながら一粒一錢たりとも拝借したい、御手当を頂戴したいなどと出願して来ない。かつまた年貢は日限より早く上納、飢饉のときでさえ夫食拝借を気に懸け、違作の年柄でもきちんと返納を欠かさない。公事出入のトラブルは一切なく、小前一同は質朴で人柄が円満、皆仲が良い村である。

この時期の下総地域の村々といえ、後年喧伝された「天保水滸伝」を地で行くような荒廃と頽廢の極にあった。無宿・博徒が横行し、村々では出稼ぎで人口は減少、年貢収納、金銭の貸借をめぐってのトラブルが絶えなかった。まさに長部村は領主にとって奇蹟に映ったのかもしれない。

ところで、清水家領知方役所は大原幽学が存在をどれだけ認識していたのかは不明である。天保十一年の先祖組合の結成からの村立て直しの実績を高く評価して村役人小前一同を褒賞したのである。そして二月二十四日、村を立て直した長部村を範とするように領分村々に対し一札まで取って衆知徹底させたのである。

領主地方役所から絶賛された長部村の伊兵衛・良左衛門ら道友にとっては、浪人幽学の長部村入村・定住による村方改革が評価され、幽学の性理学教団の活動が暗黙の了解を得たと考えたのであろうか、褒賞直後であろう弘化五年二月十六日名主伊兵衛と見習良左衛門の父子は天保十一年の議定書出願以来の村方立て直しの経過を報告し、領主から頂戴した「御聞済」の「御判」を毎月十一日の記念日に伊兵衛宅に道友家族のこらず集まって謹て拝礼しており、この間九カ年参詣を欠礼した者は一人もいないと感謝感激を申し述べている。ただし、領主と長部村に取り交わされた文書には大原幽学なる者は一切登場していない。幽学は村の人別には載らない浪人の異人なのである。この曖昧模糊とした両者の関係が牛渡村一件で一氣に白日の下に曝されることになる。

ところで、江戸訴訟で問題になる改心楼建設の許可申請は領主清水家に出されていたのであろうか。目下、改心楼の願書は二通確認できる。ひとつは全書に所収された「改心楼願下書」である。これには「嘉永二酉年六月」の年月日が記され、名主伊兵衛と代兼同見習良左衛門から清水御領御役所宛となっている。しかし、「願書は提出せざりものなり」と注記されている。もう一通は高松家に伝わった文書中の「下総国長部

表9 道友寄進人足の村々の支配

	村 名	村高(石)	支 配
1	長部	248	幕領・三卿清水氏・旗本の3給
2	諸徳寺	355	旗本3氏の3給
3	米込	963	幕領・安中藩・旗本の3給
4	岡飯田	497	旗本2氏の2給
5	野田	555	小見川藩
6	布野	110	小見川藩
7	小川	447	旗本2氏の2給
8	十日市場	430	旗本・与力給知の2給
9	府馬	1830	旗本3氏・寺領の4給
10	鍋木	1094	三卿清水氏・旗本3氏・寺領の5給
11	稲荷入(和田村のうち)	121	旗本2氏の2給
12	琴田	1839	安中藩
13	小貝野	193	多古藩
14	平山	356	小見川藩
15	桜井	368	旗本筒井氏
16	溝原	396	飯野藩・旗本2氏の3給
17	米之井	483	旗本4氏の4給
18	上総屋形	449	生実藩領
19	阿玉台	558	旗本川口氏
20	高部	428	旗本2氏2給
21	青馬	348	旗本3氏の3給
22	足川	477	与力給知
23	新町	266	幕領
24	田部	1314	幕領・小見川藩・旗本3氏の5給

村教導所取建願書草稿」ではほぼ同文であるがこれには年月日の記載はない。二通とも文中に「浪人大原幽学与申者御小人目付高松彦七郎様弟」と幽学が御家人高松彦七郎の弟として登場している。幽学が公式に姿を現すのは嘉永五年四月十八日の改心楼乱入事件の「牛渡村一件」以降であり、まして高松彦七郎がその後捏造したことであるので、これら二通は江戸訴訟の中でつくられた偽文書と考える他はない。改心楼建設の始まったばかりの「嘉永二年六月」とは事実関係で合致しない。要は改心楼建設の許可申請は出されなかったのである。改心楼乱入事件から江戸訴訟に発展し、急遽許可申請の願書をつくってみたものの実際ないものはないのである。下書にとどめて諦めたのであろう。事実、江戸訴訟の過程でも長部村の関係者は訊問に対して「一切無之」と返答している。

改心楼が長部村地内に建てられたのであるから支配領主の清水家だけで収拾可能だとするのは安易な速断であった。改心楼の大普請に参与した道友は二十数カ村にも及び、一カ年余にわたってのべ四五〇〇人をはるかに上回る村々が下総地域を移動したのである。

土普請に加わった道友の村々の領主支配をみてみよう。表9に明らかにように支配領主たるや一給は稀で、区々錯綜して五給なども珍しくないのである。東総地域は城持ち大名は皆無、小見川藩、多古藩とて一万石の弱小大名である。安中藩などそれなりの譜代藩もみえるが本藩とは遠く飛地の陣屋支配である。散見する幕領とて代官陣屋もなく江戸駐在の関東代官の事務的支配を受けるに過ぎない。まさに入り組み錯綜した最も治安・警察力の弱体な関東農村の典型といえよう。逆に直接支配の行き届かない地域だからこそ浪人大原幽学は漂泊の

末、無届けで長部村に入り、定住し、周辺村々を包括しながら性理学教団を形成出来たのである。

しかし、そうであるからといって、個別領主を無視した幽学の布教活動はいずれは幕藩制支配の枠に抵触することになる。その契機は教団の膨張がひとつの頂点に達したときの油断、奢りから来る異様さから始まる。

幽学の思いの込められた性理学教団のシンボルとして建立された改心楼が、ここまでは陰のフィクサーとして運動を牛耳ってきた幽学を摘発させ、公の場に引っ張り出す発端となったのである。

入り組み錯綜する弱体化した支配であるからこそ、関東取締出役は監視の目を光らせている。長部村に起こった異様な現象は、どこからか彼らの耳に入ったのであろう。

表10 江戸買物（嘉永2年10月16日出立）

品 物	金 額	店
瓦内金	4 両	
釘金物品々銅手洗と油皿尺三鍋	2 両 1 分 278 文	
信濃屋貫杉皮	3 両 2 分 344 文	
銅屋宇兵衛銅板同鉄	1 両 1 分 437 文	
日野屋瓶二大土瓶	4 両 2 朱	霊岩嶋南新堀一丁目 日野屋喜兵衛
炭平 大釜	5 両 1 分	
黒江屋汁碗	5 両	日本橋通一丁目 黒江屋太兵衛
黒江屋椀ぜん其外	2 両 2 分 108 文	日本橋通一丁目 黒江屋太兵衛
指物屋	1 両 3 分	
加田や釜	3 分 2 朱 512 文	
萬屋戸障子	5 両 2 分 340 文	
引手三ツ	453 文	
出府入用諸掛	2 両 1 分 2 貫 241 文	
宿見舞	2 分 300 文	
小買物品	3 両 2 分 638 文	
銅身坪 身切	1 分 2 朱 540 文	
枅柱 6 本	2 分 300 文	
鉄炮釜	1 両 324 文	
丸彦釘隠	2 分 540 文	
檜板 8 枚	3 分 432 文	
日野屋皿まし	2 朱	
釜蓋	1 分	
計	45 両 3 分 錢 7 貫 787 文	

関係資料—24

（嘉永2年閏4月18日付）

材木代	10 両 3 分 2 朱 銀 3 匁	江戸深川 才賀屋治郎兵衛
建具代内渡	7 両	小伝馬町 萬屋庄右衛門
建具代内渡	7 両 2 分 銀 12 匁	小伝馬町 萬屋庄右衛門
江戸行入用	1 両 2 分	
小 計	26 両 3 分 2 朱 銀 15 匁	

長部村のみならず諸徳寺村、まして遠方の北は岡飯田村、南は十日市場村の者まで出入りをする。馬で荷を運ぶ者、一人では目に付かないが数人連れ立って長部村に道友たちが往返するのはやはり奇異である。そのうち八石の山は一変して改心楼の骨格が姿を現す。大層な造りだ、拵えだ。そして家財調度はこの近辺にない江戸から買い求めて来たぜいたく品らしい。そういう噂がまた噂を呼び八州廻りの手先に入り、江戸に

まで聞こえたのではなからうか。取締出役の手の込んだ摘発については既に述べたので、ここでは事件の直接の契機のひとつとなった、江戸との関わりについて触れる。

改心楼と巨大消費都市江戸の影

名主をはじめ村全体が御法度を守り、質素儉約に勤めるといふ通俗道徳そのものの幽学の性理学を体現した改心楼は、道友の労働奉仕と持てる者の精一杯の献金で建立され、そこには微塵の奢侈の気はないと思いがちである。

ところが改心楼の内部にわたって調べてみると、そこには十九世紀江戸の消費の影響を認めざるを得ないのである。これは明らかに大原幽学の意向をおいてない。

未だ目論見段階の嘉永二年四月二十四日、大先生こと幽学は「材木買揃」に立ち会い、閏四月十八日には江戸に出て材木、建具等の発注にあたっている。このときの出費は金二六両三分二朱銀一五匁である。関連資料から江戸での買い物関係を拾ってみたのが表10である。

棟上に近い十月十六日には長部村を出立、江戸に向かい、金四六両余の買い物をしている。漂泊の人幽学は江戸を旅の中継点としたため、江戸の消費に通じた生活体験の持ち主であった。材木は深川の木場才賀屋治郎兵衛、建具は小伝馬町万屋庄右衛門に発注している。東総の村々からの江戸買い物としては手慣れたやり方である。

陶磁器類は霊巖嶋の日野屋喜兵衛、腕膳類は日本橋通一丁目の黒江屋太兵衛といった江戸でも名の通った店へ注文、購入している。

しかも、黒碗一〇〇人前、本山本皿一〇〇人前、茶漬茶碗一五〇人前、竹箸三〇〇膳、割はし四〇〇人前といった数字にも驚かされる。改心楼が一〇〇人規模の会合所、集会場、いわんや徒党の場となりかねないものである。

灯りは燭台、行燈、小田原提灯、夜間の集会が多かったせいか蠟燭油の消費もはんばでない。火鉢、火箸の冬季暖房よりは蚊帳木綿五〇反を購入しての夏季の蚊蚊対策の方が大がかりである。そして大量の蒲団づくりである。綿の買い入れに金八〇両余を投じているのである。江戸職

人の技術である赤銅製の大小金たらい。どれも東総の村落社会ではまだ一般に普及しない奢侈品であった。ここに他者の目が向けられ、八州廻りに増幅されて伝えられたのである。

おわりに

嘉永四年（一八五二）五月常州土浦の内田佐左衛門は関東取締出役吉岡静助から改心楼を探索するよう内命を受けた。佐左衛門は土浦藩（土屋氏九万五千石）の城下で歴代問屋役を勤める家柄に生まれながら町政をめぐって藩と衝突、隠居身分となったが、力量を買われて関東取締出役の道案内となった異色の人物である。嘉永二年の將軍小金原御鹿狩と揆を一にして東総地域を騒然とさせた博徒勢力富五郎一家の暴動の鎮圧に大いに活躍、幕府から褒賞されるという実績を持つ。隣国の道案内にもかかわらず、またまた佐左衛門に暮らし方はもちろん家財家具等分不相応な奢侈を行い、すべてが百姓たちの身のために成らないという幽学の悪い噂が聞こえて来るので内々探索してほしいという要請があったのである。

華やかな改心楼の建設が美麗な住居や奢侈な驕りに映り、風聞となつて遂に張本人大原幽学まであぶり出すことになったのである。一見質素を唱導しながら内実のところではぜいたくをしているという幽学のあらぬ噂が改心楼乱入事件に発展し、究極のところでは長期の江戸訴訟、そして幽学の自決となつて帰結するのである。

乱入事件から二カ月の嘉永五年六月十五日、関東取締出役の中山誠一郎、吉岡静助ら四名は、銚子本城にての取り調べを前に、佐原に立ち寄り、宿にわざわざかつての幽学門人籾木村の平山信一郎を招請し、事前に幽学身辺の事情聴取をしている。そこで発せられた質問の多くが改心楼にかかわる風聞に関するものであった。

長部にて大造に花麗なふしんいたしたそうだが

普請には何程懸たてあらふ

性学の者八家を立てかへるといふ事だが左様か

性学の者ハ土手をつくさふだが何の故だらふ

先生の処は石垣がついてあるさふだ

石ハ処にあるまひ銚子でも買たて有らふ

先生ハ立派なふとんを平生敷て居るといふ事だ

大きなかなたらいが有て足を洗ふにも用ゆるといふ事だ

これまでの幽学研究は幽学を質素儉約の村落復興のシンボルとして美化し、これら取締出役の質疑を権力の手先の悪巧みのデッチ上げだったとしてすべて抹殺してきた。

しかしながら今まで詳しく見てきたようにすべてが虚妄とはいえない。山を削り、地を穿ち、土手を築き、石垣で土砂を固める土普請、一九両もの銚子石の購入、八〇両もかけた綿の買い入れと道友女性たちの蒲団縫、江戸で買った金たらいなど決して根も葉もないウソではないのである。

改心楼の建設に踏み切り、江戸の消費文化を導入したことはあまりに甘い決断ではなかったのか。

何故に幽学や高弟の良左衛門たちは改心楼の建設に至ったのか。増加する道友の説法の手狭になったとか、取替子判や種々の教団儀礼の講堂が欲しいとかの理由は述べられているが、浪人漂泊の無宿幽学が選択するに足るあまりに危険な賭けであった。支配領主清水家の覚えは目出度かったにせよ、周辺二十数カ村の道友を巻き込んだ改心楼建設のイベントは関東取締出役を刺激し、遂には出動、事件として吟味の対象とされ、隠れていた大原幽学まであぶり出されることになったのである。身の危険まで冒して改心楼に賭けた幽学の性理学とは何であったのか。思想というよりは幽学の生き様の問題であり、謎に包まれた出自に迫る

本質である。

それは浪人幽学が正規の禄を食む武士以上に武士としての理想に生きた。換言するなら、武士として百姓の上に立って教化する存在としてあり続けようとした浪人のプライドにその秘密が隠されているように思う。改心楼は旧山城を地行して幽学の館として築造されたのではなかったのか。

道友門人すべてに諱、名乗りを与えたり、脇差をもたせたり、自らは父から離別の際送られた二本差と三両の死金を一生自身から離すことがなかった。

道友とともにと念しながら、武士を捨てられなかった幽学の本質的選択が改心楼の建築に向かわせたのであろうか。

(二〇〇二・一一・五)

(国立歴史民俗博物館歴史研究部)
(二〇〇三年五月二十三日受理、二〇〇三年七月十八日審査終了)

OHARA Yugaku and the Construction of Kaishinro

TAKAHASHI Satoshi

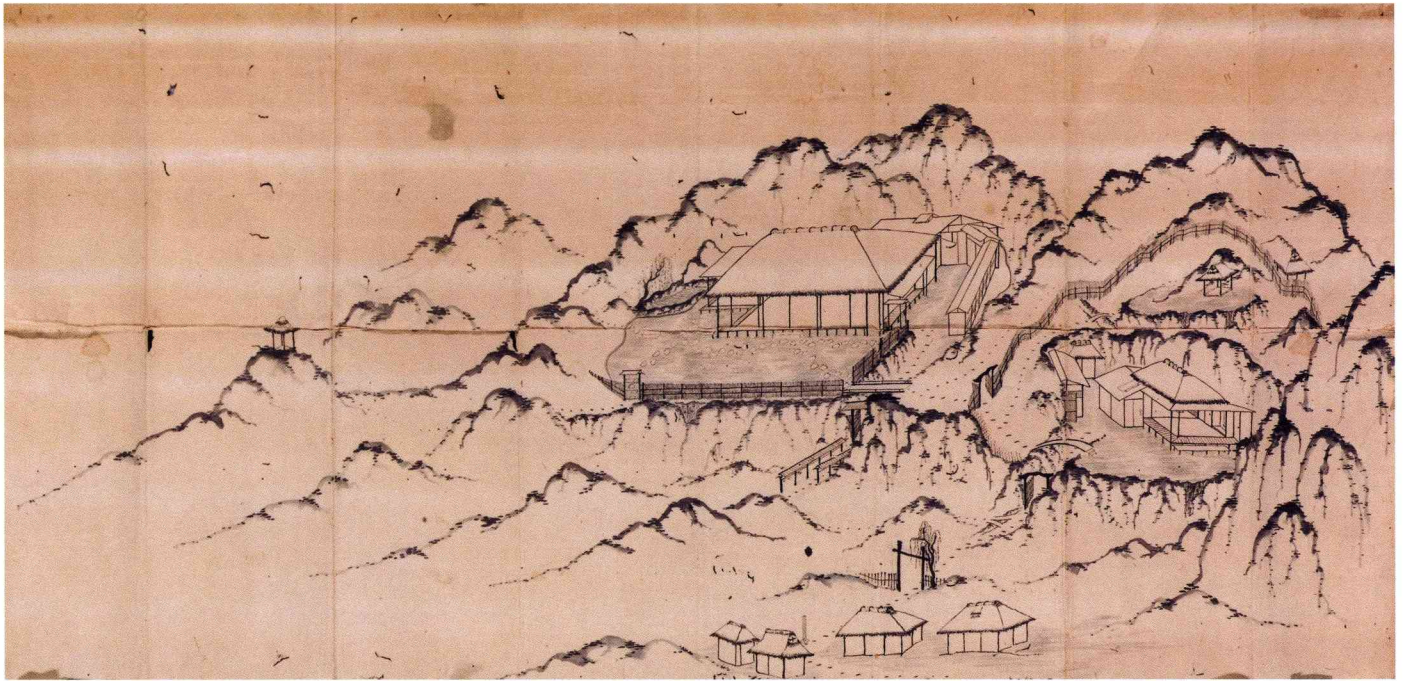
Kaishinro, the symbol of the Sei-gaku association, was the crystallization of the activities of OHARA Yugaku in the Toso region. Kaishinro is also well known as the place that was entered by force by agents and enforcers working for the Kanto authorities at the beginning of the crackdown on Yugaku. And it was the construction of the huge building that was Kaishinro that aroused the suspicions of the Kanto authorities concerning Yugaku in the first place.

During the course of his Edo prosecution, Yugaku and his associates justified Kaishinro as a simple building born from the dedication of followers based on the tenet of frugality. Many primary resources remain today that were produced in the course of the construction of Kaishinro.

Documents dating from the drawings dated April 15, 1849 through to the local construction records of supporters up until the opening of the center on January 19 the following year establish the employment of builders, roofers, *tatami* makers, stonemasons and plasterers for the construction of the building through to the purchase of household items such as furniture, dishes, bedding and mosquito nets. At the same time, they also provide details on the labor provided by the supporters who were mobilized for the building's construction. It is precisely the actions of these supporters that serve as a barometer for measuring the competence of OHARA Yugaku's Sei-gaku association.

Evidence was given during the Edo prosecution that Yugaku submitted documents to the law court claiming that the cost of the construction of Kaishinro was upward of 99 *ryo* of gold and that this money was put up by nine leading supporters. However, a close inspection of books relating to the construction put the cost upward of 449 *ryo* of gold, or as much as 4.5 times the amount that had been declared. Yugaku went to Edo to buy important materials, and bought pieces of furniture that may well be considered luxury items from well-known merchants. These purchases alone cost more than 72 *ryo* of gold.

As many as 4,432 supporters were mobilized over a 180-day period for the construction of Kaishinro, coming from a total of 24 villages. One cannot possibly play down the impact that the construction of Yugaku's Kaishinro had on this region. One could say that in light of its size, construction costs, and the number and origin of the supporters who were mobilized, in one sense it was only natural that the suspicions of the Kanto authorities were aroused. Kaishinro was destroyed and turned to ruins upon Yugaku's defeat in the Edo prosecution. Two paintings are all that remind us of its former grandeur.



A 改心楼之図



B 長部村八石の全景